

大学生の衣類の廃棄と リメイクに対する意識と行動

辻 幸 恵

要旨

大学生が衣類の廃棄時に、具体的にどのような行動をとっているのか、また衣類の廃棄時には、ゴミの分別やリサイクルなどの行動に対して、心理的にはどのように感じているのかを明らかにすることを目的とした。調査の結果、ゴミの分別行動は多くの大学生たちが実践しているが、衣類の修理などの技術を伴うものは実効性が低くなった。大学生が実行できるのは、分別できるゴミ箱の設置など、分別が簡単にできる環境をつくることであり、リメイク品を作り出すためには、実際にリメイクができるように技術と正しい知識を与えることが重要であることが見いだせた。

キーワード：廃棄，消費行動，意識，リメイク，衣類

1. はじめに

エコ消費や持続可能な社会という言葉と共に、SDGs (Sustainable Development Goals)、持続可能な開発目標という言葉が聞くことも多くなり、持続可能なという表現に珍しさはなくなった。周知のとおり、SDGsは2015年に国連サミットにおいて採択された国際目標で、17の世界的目標、169の達成基準、232の指標がある¹⁾。たとえば、SDGsの「7. エネルギーをみんなに、そしてクリーンに」「13. 気候変動に具体的な対策を」「14. 海の豊かさを守ろう」「15. 陸の豊かさも守ろう」などの目標が環境問題と密接に関連しているというイメージを大学生たちは有している。ただし、これらのイメージはおおまかなものであり、正確な知識に裏付けられたものではない。特に文系の学問分野に所属している大学生たちは、海洋汚染や森林破壊についての具体的な数値根拠を把握してはいない。しかし、細かな数値を把握できていないからと言って、文系の学問分野に所属している大学生たちの環境問題に対する意識や関心が低いわけではないのである。現に、大学生たちもコロナ禍を経て、消費社会から持続可能な社会へ移行しつつあることは感じているようである。貞包 (2023) は消費社会が諸悪の根源ではないこと、今でも消費社会を選択し、受け入れ

ている人々がいることを指摘した上で、消費社会を乗り越える方法を提示している。その軸は2つある。ひとつは個人的な解決と集団的な解決の軸、もうひとつは格差への対応と環境問題への対応の軸である。たとえば、個人的な解決と環境問題への対応の象限にエシカルな消費があるとされている³⁾。

また、持続可能な社会への取り組みは、おそらく日本での2007年頃の「もったいない」ブームもその一環であると考えられる⁴⁾。もちろん、「もったいない」と思う気持ちは伝統的で文化的な日本人の気持ちのひとつであるが、現在にも必要な心理であり、その気持ちがどの程度、若者に浸透しているのかという状況の把握も必要なのである⁵⁾。なぜならば、「もったいない」と感じる先に、もったいないことをやめようとする行動が存在し、その行動を起こせるかどうか課題になるからである。その行動こそがエコ消費や持続可能な社会を築く礎になるからである。

本論文では文系の学問分野に所属している大学生たちを対象に、環境問題をどのような形で日常的に意識しているのかを明らかにすることを目的とした。大学生たちの有する衣類の破棄やリメイク品に対するイメージなどへの具体的な意識を明らかにすることによって、彼らが必要としているモノやサービス、あるいは情報を把握することができる。ニーズを把握することによって、より効率的にモノやサービス、あるいは情報を大学生たちに届けることが可能になる。効率的になることによって無駄をなくすことが可能になる。ひいては環境の悪化を防ぐことになると考える。また、環境問題への意識や関心と、実際の行動とが必ずしも一致しないことを松原(2019)が指摘しているが、本論文では意識だけではなく、実際の行動にも着目する。意識したことがどのような行動となって表れるのかを解明することは重要な課題である。意識や関心と、実際の行動とが一致しない例として、後藤と八木(2001)は、買物袋の持参率の低さを挙げている。買物袋を持参することはレジ袋を減少させ、環境への負荷の軽減につながることは大学生たちにもわかっていることである。しかし、買物袋を持参することが面倒くさいという理由で行動に移さないと述べている。このことは、面倒くさいと感じさせない工夫があれば、買物袋の持参率が上昇することを示唆していると考えられる。

若者の環境に対する意識を明確にし、意識と行動の不一致の要因になる事象を工夫することによって改善し、その先の行動を変化させることは、エコ消費や持続可能な社会を実現するために意義のあることである。

2. 大学生たちの日常的な行動

ここでは、大学生たちは日常生活においてどのような環境への配慮行動を実施している

のかについて、若者の日常生活における先行研究を参考にして述べる。松原、後藤（2012）は若者の「もったいない」という生活感覚やものを大事にする生活習慣について20歳から29歳までの男女を対象に調査を実施した。内訳は大学生、大学院生、社会人の合計337人である。松原らは「もったいない」意識を調べるための項目として14項目、実際の行動に関する項目として13項目を設定している。その結果、男女共通にもったいないと感じるものは食品廃棄に関すること、行動としては「電気つけ放し」「水流し放し」が挙げられていた⁶⁾。2023年に入り、電気代金の高騰がニュースなどで報じられるようになったことから、大学内でも節電への呼びかけがなされるようになった。大学生たちの間でも節電への意識が以前よりも高まっていることが考えられるので、「電気つけ放し」という行動は以前よりも減少していると予想される。

さて、若者の行動と環境問題をダイレクトに結びつけた先行研究として大藪、高橋（2008）の調査結果を挙げる。大藪らは環境問題を認識しながらも実際にそれを日常生活に活かしている消費者の少なさを指摘している⁷⁾。さらに、若者に特化し、彼らの行動を調査した結果、関心のある環境問題は1位に地球温暖化で685人、2位に森林破壊447人、3位にリサイクル389人となった⁸⁾。なお、大藪、高橋（2018）が調査対象とした若者は岐阜県下の小学生159人、中学生110人、高校生48人、大学生743人の合計1060人である。調査時期は2012年～2015年で、アンケートを用いた調査を実施した。アンケート項目では、関心・意識の分野では「3R（REDUCE, REUSE, RECYCLE）や4R（3R+REFUSE）について知っていますか」という質問項目が挙げられているが、両方を知っていると回答した若者は小学生21.1%、中学生8.2%、高校生18.8%、大学生36.5%であった。小学生が高い割合を示した原因は、小学生のみ調査の事前に環境問題に関する授業を受講したためであると大藪が指摘している。実際のリサイクルが日本ではどの程度、実施されているのかについては河井（2021）が「一般廃棄物のリサイクル率は2007年度以降停滞し、環境省が設定した目標を達成できていない」と述べている。なお、2018年の日本のリサイクル率は19.9%であった。この数値はEU加盟国のリサイクル率と比較すると低いことも指摘している⁹⁾。なお、2022年度のEU加盟国のリサイクル率は64.0%であった。浅野、坂本（2009）は循環型社会と企業の社会的責任との関係の中で、廃棄物をマテリアルフローとして把握し、焼却と埋め立て中心の廃棄物処理から「循環」処理、すなわち、3R（Reduce: リデュース [削減], Reuse: リユース [再使用], Recycle: リサイクル [循環利用]）へ移行する社会をめざすことであると提言し、循環型社会に3Rが不可欠であることを述べている。廃棄そのものに関しても大学内でも駅構内でも至るところに分別ごみ箱が設置されており、学生たちもゴミの分別は日常的な行動である。また、近年は多くの自治体で家庭ごみを出

す場合、曜日によって種別に分かれ、ゴミを分別する行動は多くの消費者にとっても、もはや日常的な行動のひとつである。

さて、リユース（再利用）の具体的な品目のひとつに古着が挙げられる。古着に関しては山田、西澤、重田（2004）が大学生の衣服の処分および古着の入手の実態を明らかにした。調査は、2002年に関西の大学に所属している男女を対象に行われ、352の有効票が分析に用いられた。ここから不要となった衣服をゴミとして廃棄する者が全体の約7割を占め、有効利用する者より多かったこと、女性で古着を所持しない者は潔癖性が高いこと、男性で古着を所持する者は潔癖性と関連が無いことが結果として得られた。¹⁰⁾ いずれにしてもリユース品は俗にいう中古品であるため衛生的な管理が求められる。清潔か否かはその利用者（消費者）への心理に大きく影響を及ぼすと考えられるからである。一方、リメイク品と呼ばれる商品も昨今は目にする機会が増加した。これは古着などのリユースとは異なり、古い既存の商品に何らかの手が加わった商品を販売する店が増加したことが原因である。修理すれば使用可能になるものを活用することに対するイメージが向上してきたからである。

3. 大学生たちの廃棄とリメイクに対する認識

3.1 大学生の廃棄とリメイクに対する心理要因に関する調査

ここでは衣類の廃棄に着目をした。衣類の廃棄については岩地（2010）が「不要となって家庭から排出される衣料品は年間推定16億4万4000トンである」こと、またその中で「リサイクル率は22%で、処理処分率が78%にものぼること」を明らかにしている。また家庭内死蔵衣服が多いことも指摘している。環境省による令和2年度のファッションと環境に関する調査では、2022年の衣類の国内新規供給量は合計81.9万トンであった。その約9割に相当する推計78.7万トンが事業所及び家庭から使用後に手放されると報告がある。そして廃棄される量は計51.0万トンで、手放される衣類の64.8%にあたる。リサイクルされる量が15.6%、リユースされる量が19.6%であることから圧倒的に廃棄される量が多いことがわかる。

ここからの調査に関しては繊維学会2023年次大会において筆者が口頭発表した内容に加筆したものである。大会は2023年6月14日から16日まで東京都江戸川区のタワーホール船堀で開催された。予備調査の目的は、大学生たちの衣類の廃棄に関する実態や心理を知ることや、そこで得られた特徴的なワードを元にして本調査で使用する質問項目を作成することである。廃棄そのものの調査に関しては2022年の繊維学会年次大会での口頭発表の折に、2つの結果を報告している。1つ目は大学生たちが手持ちの衣類を廃棄するタイミン

グである。それは季節の変わり目、大掃除の時、引っ越しの時、卒業の時、そして新しい衣類を購入した時が上位にランクインした。2つ目は衣類の廃棄理由である。理由には物的理由と心的理由の2つが得られた。つまりこれらが衣類の廃棄に関する2基準である。前者の物的理由は破損や劣化という衣類の製品そのものに由来するもので、後者の心的理由は「感性に合わなくなった」、「飽きた」などが挙げられている。そして心的理由の中にも外部要因と内部要因の2つの側面があることを見いだした。外部要因とは自身の外の世界を指し、たとえば高校を卒業したという事実や、世間での流行などが挙げられ、内部要因とは主に自分がどのように感じるのかという自己を中心とした感じ方である。

さて、ここでは予備調査と本調査を実施した。最初に、予備調査について述べる。時期は2022年10月上旬に ZOOM を使用して、グループディスカッションを実施した。神戸市の総合大学（私学）に所属する男子5人、女子5人を対象とした。衣類を廃棄する基準についてディスカッションを実施したが、2022年の先行研究からは「感性に合わなくなった」「流行おくれ」「飽きた」「周囲の意見を聞いた」という4つの心的理由が挙げられた。これらの4つをさらに探求するためにディスカッションを実施した結果、21の質問項目を本調査の質問項目として設置することができた（表1）。

表1 4つの基準に対応した具体的な心理

n=10

感性に合わなくなった	自分の好みが変わった時 自分の趣味ではなくなった時 子供っぽく感じた時・年齢との不一致 自分のライフスタイルに合わなくなった時 着心地が悪くなったと感じた時 自分のファッションセンスに合わなくなった時	流行おくれ	流行が終わった、過ぎた時・流行ではなくなった時 季節に合わせて新作がでた時 全然着ていないと感じた時 時代遅れで恥ずかしいと感じた時 デザインが古くなったと思った時 ストックが貯まった時に古いものから捨てる
	周囲にかぶる人が多い時 着たら思った感じと異なっている時 似合わない時	周囲の意見を聞いた	他人の方がその服を有効活用できると思った時 買ったが、友人の評価が悪い時 持っている服の量が多くなった時
飽きた	同じ色の服が増えてきた時 去年と同じシーズンに1度も着なかったら捨てる その洋服に飽きた時あるいはデザインに飽きた		合計21項目

筆者作成

次に、本調査を2022年11月上旬に、Google フォームを用いたアンケート調査を実施した。対象は関西在住の大学生205人（男103人、女102人）である。記述式回答方式で205人のうち、ランダムに選択した男女20人ずつ合計40人に衣類の所持枚数を尋ねた。男子はジャケット、コート、シャツ、Tシャツ、セーター、トレーナー、パンツ、ジーパン、スーツの9品目を、女子は男子の9品目にスカートを加えた10品目の所持枚数を記入してもらった。選択式回答方式では205人に5段階尺度を用いて、その質問に対する重要度を尋

ねた。5段階尺度の意味は1:まったく重要ではない, 2:やや重要ではない, 3:どちらでもない, 4:やや重要である, 5:たいへん重要である, として該当箇所に1つだけ○を付けてもらった。よって, 数字が大きいくほどその項目は重要になってくる。ここで, 40人を対象とした所持枚数の調査結果を表2に示した。

ここからは結果について述べる。所持枚数については表2に男女20人ずつ, 合計40人の回答結果を示した。多くの品目について男子よりも女子の方が所持枚数は多くなった。表2だけではわかりにくいので表2を図1としてグラフ化した。図1は男女比較ということで女子のみに尋ねたスカートはグラフには入れなかった。図1をみると, パンツやジーパンの女子の所持率が高くなっている。よって, 女子はパンツ, ジーパン, スカートの3品目を所持していることから, 圧倒的に男子よりも下に履く衣類の所持数が多いのである。

表2 男女別の衣類の所持枚数

n=40

学年	男子									女子										
	ジャケット	コート	シャツ	Tシャツ	セーター	トレーナー	パンツ	ジーパン	スーツ	学年	ジャケット	コート	シャツ	Tシャツ	セーター	トレーナー	パンツ	ジーパン	スーツ	スカート
3	2	0	2	3	1	2	4	0	1	3	3	2	3	4	2	3	2	1	2	3
3	1	0	3	4	2	1	5	0	1	3	3	1	4	5	3	2	6	1	2	4
3	0	1	2	5	3	2	4	1	1	3	2	2	5	5	2	2	5	2	2	2
3	1	1	1	3	2	1	3	1	1	3	2	2	4	5	4	2	4	1	2	3
3	2	1	2	2	4	0	4	1	1	3	2	2	3	6	4	3	3	1	2	3
4	3	1	0	4	2	1	5	0	1	4	6	1	6	5	3	2	2	2	3	4
3	4	1	2	8	3	0	4	1	2	3	5	2	5	7	5	2	4	1	2	5
3	2	0	2	4	1	1	3	1	1	3	4	2	4	5	2	4	4	1	2	3
3	2	0	2	5	2	1	3	1	1	3	3	2	3	6	3	2	4	1	2	6
3	2	1	3	2	1	1	4	1	1	3	3	3	3	8	3	2	5	1	1	2
3	2	0	2	3	0	2	4	2	1	3	4	2	2	6	4	3	5	1	1	4
3	0	1	0	3	2	1	4	1	2	3	1	1	5	3	3	2	5	1	1	3
3	1	1	1	3	0	1	5	3	1	3	2	2	4	4	3	4	5	2	2	3
4	1	1	1	2	2	1	6	2	1	4	2	2	4	7	3	4	6	4	1	2
3	1	0	1	4	0	1	5	4	2	3	2	2	4	5	3	2	5	5	2	2
3	1	1	2	1	3	0	4	2	1	3	3	2	6	6	4	3	5	4	1	3
3	2	0	1	2	0	1	4	2	1	3	4	2	5	4	4	3	5	3	2	3
3	0	1	2	3	1	2	3	2	2	3	5	1	4	5	4	3	4	3	2	4
4	1	1	1	3	1	2	4	1	1	4	4	1	3	5	4	4	4	2	1	3
4	5	0	1	3	1	2	5	1	1	3	4	2	3	4	4	4	4	3	2	3
計	33	12	31	67	31	23	83	27	24	計	64	36	80	105	67	56	87	40	35	65

筆者作成

図1を見ると, 枚数の差が一番大きい品目はコートになった。男子が12枚, 女子が36枚という回答から女子は男子の3倍の数を所有していることになる。40人中男子は3人に1

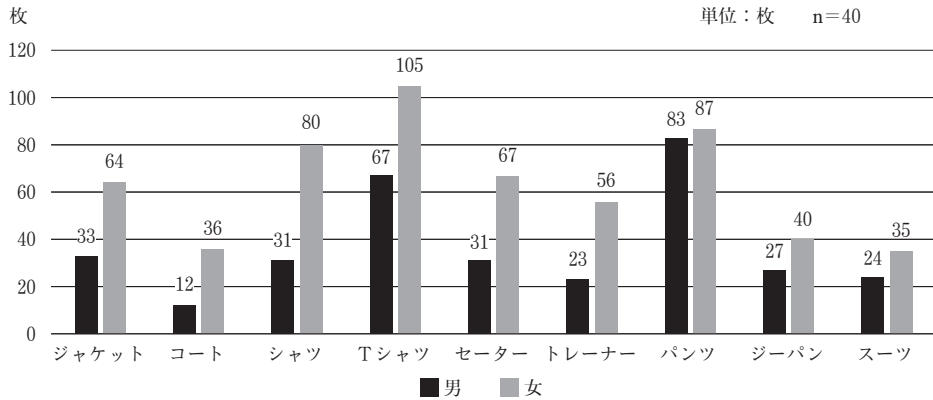


図1 所持品目の男女比較

筆者作成

人しかコートをもっていないが、女子は40人中36人で9割が所持していることになる。なお、この調査は11月上旬に実施しているのでコートがなくても過ごすことのできる季節である。おそらくはジャケットやコートが本格的に必要なシーズンの前の段階で調査を実施しているため、これから購入しようと思っている調査対象者は存在すると考えられる。

スーツは4年生になると、ほとんどの学生がすでに所持しているが、3年生はこれから就職活動が本格化すれば購入する者が多くなると考えられる。なお、入学式などで着用したスーツやワンピースは冠婚葬祭用の衣類とし、ここではビジネススーツを想定した質問となっている。

男子は衣類が必要になった時に購入するという傾向が見られる。よって、ジャケットやコート、あるいはスーツを必要になればその時に購入するのである。普段、あまり使用しない品目に対してはストックするという意識は低いと考えられる。これに対して女子はコートやジャケット、スーツもどちらかという、すぐに使用できるようにストックする意識があると考えられる。

次に、衣類の廃棄時に重要視する項目の結果について述べる。質問項目として予備調査からは21項目が選択されたが、似たような要素を含む質問はまとめることにした。そのために相関分析を実施し、結果を表3に示した。衣類の廃棄は『「好みが変わった」と感じた時に行う』と、『「趣味が変わった」と感じた時に行う』という項目間には0.798という非常に高い相関が見られ、2つ項目は1つの項目にまとめた。

また、表3内の「時代遅れに感じた時」と「流行遅れに感じた時」間は0.382、「センスが変わった時」と「趣味が変わった時」の間は0.328と中程度の相関は見られるが、今回は高い相関ではないので、これらの項目は別項目として質問項目に採用した。よって、本

表3 予備調査で得られた質問項目間の関係

	好み	趣味	年齢	ライフ	着心地	センス	違和感	似合い	同色	捨てる	飽きた	流行遅	新作	不着	時代遅	古い	貯まる	かぶる	他人	評価低	大量
好み	1.000	0.798	0.110	0.008	0.012	0.158	0.004	0.205	0.077	0.089	0.118	0.009	0.028	0.299	0.006	0.004	0.147	0.008	0.009	0.173	0.004
趣味		1.000	0.125	0.122	0.028	0.328	0.147	0.011	0.008	0.107	0.009	0.199	0.171	0.098	0.104	0.178	0.002	0.098	0.036	0.112	0.204
年齢			1.000	0.224	0.008	0.224	0.146	0.085	0.142	0.128	0.054	0.039	0.112	0.008	0.098	0.111	0.100	0.127	0.158	0.008	0.002
ライフ				1.000	0.007	0.087	0.066	0.225	0.088	0.047	0.144	0.004	0.004	0.123	0.128	0.202	0.102	0.002	0.002	0.104	0.004
着心地					1.000	0.178	0.278	0.107	0.134	0.187	0.018	0.298	0.011	0.166	0.107	0.002	0.008	0.006	0.007	0.009	0.007
センス						1.000	0.008	0.009	0.334	0.003	0.069	0.006	0.164	0.008	0.004	0.144	0.002	0.003	0.002	0.002	0.103
違和感							1.000	0.104	0.009	0.047	0.177	0.302	0.224	0.258	0.197	0.009	0.004	0.004	0.001	0.133	0.014
似合い								1.000	0.321	0.122	0.017	0.200	0.136	0.004	0.014	0.125	0.006	0.008	0.008	0.158	0.044
同色									1.000	0.003	0.201	0.126	0.202	0.314	0.136	0.007	0.155	0.007	0.107	0.174	0.188
捨てる										1.000	0.006	0.033	0.004	0.345	0.107	0.268	0.004	0.125	0.124	0.009	0.100
飽きた											1.000	0.008	0.003	0.104	0.187	0.047	0.144	0.177	0.196	0.005	0.003
流行遅												1.000	0.002	0.345	0.382	0.208	0.113	0.132	0.004	0.004	0.144
新作													1.000	0.113	0.002	0.004	0.007	0.004	0.102	0.186	0.008
不着														1.000	0.003	0.202	0.004	0.003	0.001	0.168	0.008
時代遅															1.000	0.114	0.208	0.144	0.008	0.222	0.135
古い																1.000	0.002	0.114	0.004	0.182	0.126
貯まる																	1.000	0.003	0.123	0.104	0.009
かぶる																		1.000	0.102	0.002	0.008
他人																			1.000	0.115	0.114
評価低																				1.000	0.008
大量																					1.000

筆者作成

調査では全体で20項目の質問に対して回答してもらった。合計20の質問項目に対して、調査対象の大学生たち205人が回答した平均値を男女別に示したものが表4である。表4のとおり、男子の平均値よりも女子の平均値の方が全体的に高いことが理解できる。女子大学生の場合、平均値が3.80を超える項目が8項目得られた。男子大学生の場合、平均値が3.80を超える項目はなく、最高値でも「着心地が悪くなったと感じた時」で3.78であった。これは衣類を廃棄する時に重要視する項目が男子よりも多いことを意味している。

また、男女差があった質問項目は20のうち8項目であった(表5)。この8項目のうち、7項目は女子大学生の方の平均値が高く、1項目だけが男子大学生の平均値が高くなった。それは「着たら思った感じと異なっている時」(3.15)のみである。女子大学生は「着たら思った感じと異なっている時」は2.00であった。つまり、女子大学生は「着たら思った感じと異なっている時」に廃棄することに対しては重要ではないという判断なのである。そもそも女子大学生たちはひとりで買物に行くことも男子大学生よりも少なく、友人や親と一緒にいき、ショッピングを楽しむことに時間をかけている。よって、試着の機会も多いと考えられる。よって、「着たら思った感じと異なる」ことは購入前に気が付く機会があると考えられる。

表5の数値を元に男女の比較が人目でわかるように図2にまとめた。

図2を見ると明らかに男子よりも女子の棒グラフが長く、廃棄に対して多くの項目を念

表4 男女別の平均値

n=205

	男子	女子	検定
自分の好みが変わった時・自分の趣味ではなくなった時	3.64	3.75	
子供っぽく感じた時・年齢との不一致	2.48	3.85	**
デザインが古くなったと思った時	3.25	3.80	*
同じ色の服が増えてきた時	2.65	2.85	
他人の方がその服を有効活用できると思った時	3.20	3.40	
自分のライフスタイルに合わなくなった時	2.65	3.85	**
去年と同じシーズンに1度も着なかったら捨てる	2.95	2.98	
流行が終わった、過ぎた時・流行ではなくなった時	2.45	3.45	**
季節に合わせて新作がでた時	2.77	3.10	
全然着ていないと感じた時	3.45	3.55	
時代遅れで恥ずかしいと感じた時	3.22	3.83	*
着心地が悪くなったと感じた時	3.78	3.80	
自分のファッションセンスに合わなくなった時	3.55	3.58	
持っている服の量が多くなった時	2.55	3.85	**
その洋服に飽きた時あるいはデザインに飽きた	3.45	3.56	
ストックが貯まった時に古いものから捨てる	2.20	2.10	
買ったが、友人の評価が悪い時	3.68	3.80	
着たら思った感じと異なっている時	3.15	2.00	**
似合わない時	3.15	3.20	
周囲にかぶる人が多い時	2.25	3.83	**

注) 小数点以下第3位を四捨五入。* : 5%, ** : 1%で優位

筆者作成

表5 項目ごとの平均値の男女比較で差があった項目

n=205

質問項目	男子	女子	検定
子供っぽく感じた時・年齢との不一致	2.48	3.85	**
デザインが古くなったと思った時	3.25	3.80	*
自分のライフスタイルに合わなくなった時	2.65	3.85	**
流行が終わった、過ぎた時・流行ではなくなった時	2.45	3.45	**
時代遅れで恥ずかしいと感じた時	3.22	3.83	*
持っている服の量が多くなった時	2.55	3.85	**
着たら思った感じと異なっている時	3.15	2.00	**
周囲にかぶる人が多い時	2.25	3.83	**

注) 小数点以下第3位を四捨五入。* : 5%, ** : 1%で優位

筆者作成

頭に置いていることが理解できる。

ここからは女子大学生が衣類を破棄する心的理由を考察する。昨年の調査結果から廃棄には内的要因と外的要因があることが見いだされた。本論文でも内的要因と外的要因に分けて考察する。最初に平均値が最も高い3.85であった「子供っぽく感じた時・年齢との不一致」は内的要因であると考えられる。子供っぽく感じるのはあくまで自身の感性だからである。これに対して「自分のライフスタイルに合わなくなった時」(3.85)は外的要因である。このことから女子大学生が衣類を廃棄することは、高校から大学に入学したことによって

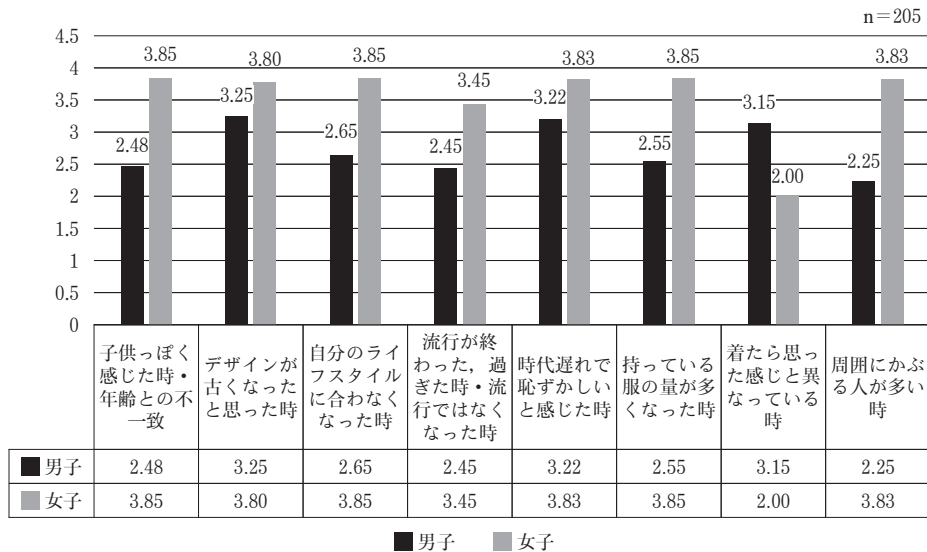


図2 平均値の男女比較の図

筆者作成

生活様式（装い）が大きく変化したことが考えられる。高校時代には制服で一日の大半を過ごしていたが、多くの大学では私服での登校になる。よって、高校時代に友達と遊びに行く時に着用していた衣類を子供っぽく感じ、廃棄をされると考えられる。また、「持っている服の量が多くなった時」（3.85）に関しても、衝動買いの有無にかかわらず日常的に男子大学生と比較すると購入量が多いと推察できる。その理由としては購入機会の環境を利用していることが考えられる。たとえば、男子大学生と比較すると、女子大学生は大学の帰り道で友人とショッピングを楽しむ機会の多さや、インターネットを使用して衣類を検索すること、あるいは衣類のレンタルなどのサービス利用も積極的に行っていると考えられるからである。次に平均値が高かったのは「時代遅れで恥ずかしいと感じた時」（3.83）と「周囲にかぶる人が多い時」（3.83）であるが、これは多くの人々の中での自分のポジションを気にしていると言えよう。差別化への意識が働いており、他との違いを求めていると考えられる。みんなの中に埋没したくないという意識も垣間見られる。ただし、これらの項目は流行を直接的に意識しているとは言い切れない。流行への意識は別の項目でたずねたが、3.45の平均値が得られているからである。

ここからは男子大学生が衣類を破棄する心的理由を考察する。全体的に女子大学生よりも平均値が低いことがわかる。つまり、衣類の廃棄の心的理由を重視していないのである。男子大学生の中で一番平均値が高かったのは3.78の「着心地が悪くなったと感じた時」で

ある。ただし、これは検定では男女差が得られておらず、女子大学生も平均値が3.80と高くなっているため、男子大学生だけの特徴ではない。着心地が悪くなった原因としては衣類そのものの型くずれや縮みという製品の劣化や、自身の体形が変化したことが考えられる。男子大学生の平均値が一番高かった「着心地が悪くなったと感じた時」の理由から、男子は特に窮屈に感じる衣類は好まないことが推察できる。つまりリラックスできる、あるいは自然体での衣類の着用を求めているのである。

次に、男子大学生の平均値が高かった項目は「買ったが友人の評価が悪い時」で3.68となっている。「着心地が悪くなったと感じた時」と同様に女子大学生の平均値も3.80と高い数値を示しているため、男子だけの特徴ではない。いずれも女子大学生の平均値の方が高い結果となった。

さて、図2に示したように男女差がある項目の中で男子の平均値が女子よりも高かった項目は「着たら思った感じと異なる」だけである。ただし、平均値が高いといっても3.15で、実際にはどちらでもないという評価に近くなっている。むしろ女子大学生の平均値が2.00で重要視していない項目であることがわかる。つまり廃棄の段階で「着たら思った感じと異なる」衣類が少ないと考えられる。女子大学生は、購入前に試着をする、あるいはインターネットで試着ができない場合でも購入時にしっかり吟味しているため、そのような衣類をそもそも購入しないと考えられる。男子大学生が試着をしていないことを示すデータとして2015年に筆者が実施した調査結果においても男子大学生200人のうち、カジュアルな衣類を必ず試着する割合は9.0%しかいなかった。この調査において一番多く試着された品目はスーツで、次にはジーパンであった。特にスーツは就職活動用に使用するため、念入りに購入していると考えられる。なお、女子大学生200人のうち、カジュアルな衣類を必ず試着する割合は37.5%で、男子大学生の4倍以上となった¹¹⁾。

学生の衣類の廃棄に対する心理要因に関する調査から考察できることは、男子大学生よりも女子大学生の廃棄の心的理由の平均値が全体的に高い傾向にあることから、女子大学生の方が衣類の廃棄に対する心的な基準が厳しいことが考えられる。つまり、衣類を取得する時と同様に廃棄の時も多面的な要因を重要視しているのである。ここから衣類は多面的な要因を総合的に包括するものであるという女子大学生の価値観もうかがえる。よって、本調査からは女子大学生の廃棄の心的理由の背景には、ライフスタイルの変化や所持数の多さが見いだせ、廃棄段階においても重要視する項目が多いことから、購入にも廃棄にも厳しい基準を有していることが考えられる。この厳しい基準があるからこそ、衣類だけではなく、廃棄行動に対する意識も明確であると推察できる。

3.2 大学生たちが抱くリメイク品のイメージ

本節の内容は2023年5月27日から29日まで東京家政大学で開催された日本家政学会第75回年次大会において筆者が口頭発表したものに加筆した。家庭から出される廃棄衣類の量を減らす方法のひとつとしてリメイク品の活用が考えられる。

さて、リメイク品とは「元の素材を生かして、作り直す、作り替えた再生品」と定義されている¹²⁾。たとえば、ジーンズがはけなくなった場合にそれを元にしてトートバッグを作れば、トートバッグはジーンズのリメイク品になるのである。リメイク品の使用が増加することによって、ひいてはゴミの削減という行動につながるのである。ここではファッション分野の小物(雑貨)を対象としたリメイク品に対して、大学生たちがどのようなイメージを抱いているのかを明らかにするために予備調査と本調査の2回の調査を実施した。

予備調査は2022年10月12日に実施した。調査対象は総合私立大学に所属する大学生(21歳)の男女3人ずつ合計6人である。彼らに70分間ZOOMを用いてインタビューを実施した。内容はファッション小物(雑貨を含む)のリメイク品に対するイメージ、好悪、意見などを尋ねた。なお、このインタビューは録画し、それをテキストマイニングによって分析した。

インタビューで得られた意見の一部を表6に示した。

表6 インタビューで得られた大学生のリメイク品への意見

n=6

<p>男子</p> <p>リサイクルは素材への変換、リユースはそのまま活用、リメイクは何か素材を改造するイメージがある ゴミにならないように新しいものにするには工具や機械が必要だ 家具などのリメイクはエシカルにつながる 古い家でも柱がしっかりしていればレトロな感じでリメイクできる 店なども居ぬきとってリメイクすると建設費が節約できると聞いた 台所机を木材にすれば環境にも良いし、リメイクの材料にもなりそうだ。</p>
<p>女子</p> <p>廃材を生かしてハンドメイドアクセサリーをつくる作家もいるらしい 古い布で巾着などをつくれればゴミ削減になる 古い洋服をハンドメイドで好きなボタンなどをつけかえたらリユースできる 手仕事が好きだし、物にも感謝したいから少し破れても繕って使っている 感謝の気持ちで工芸品までいかななくても手作りでリメイクして長く使いたい</p>

筆者作成

表6で示したように男女間で意見の相違がみられた。次にインタビュー内で得られた会話を単語としてとらえ、その出現回数をテキストマイニングを用いて算出し、その結果を図3に示した。

ここでは「ゴミ」が含まれるワードである「ゴミになる」「ゴミとして残ってしまう」

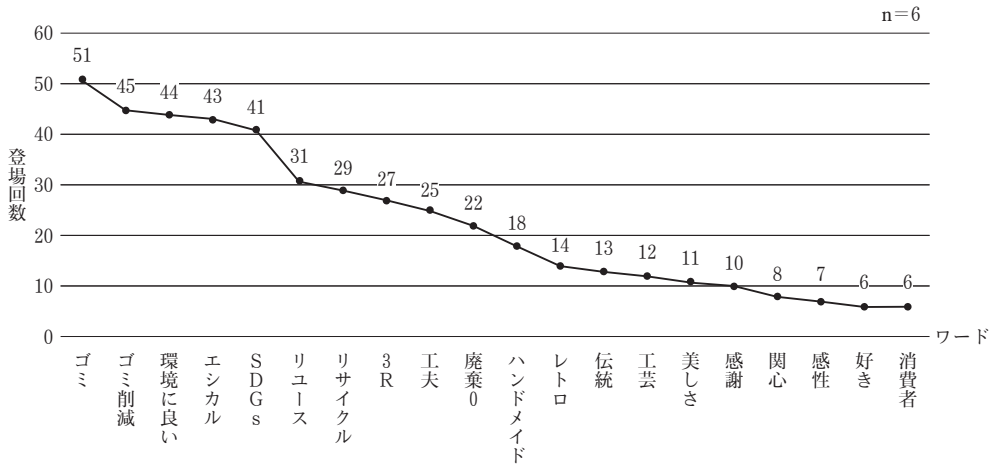


図3 予備調査から得られたワードの抽出

筆者作成

「ゴミそのものだ」「ゴミとして扱うしかない」などはすべてまとめて「ゴミ」のワードとした。ただし、図3に示したように「ゴミ」を何らかの方法でなくそうという意識が感じられるものは「ゴミ削減」としてまとめた。それらは「ゴミを減らしたい」「ゴミにならないようにしたい」「ゴミではなく使えるものにしたい」などである。

さて、図3に示した以外にも「ケチ」「節約」「古い」「SDGs」などのワードも得られた。そこで予備調査で得られたワードの中から代表的なものをポジティブなワードとネガティブなワードの2つに分類し、表7にまとめた。

表7 得られたワードの二分類

n=6

ポジティブ		ネガティブ
ゴミ削減	工芸	ゴミ
環境に良い	美しい	貧乏くさい
エシカル	感謝	ケチ
SDGs	関心	節約
リユース	好き	古い
リサイクル	レトロ	
廃棄0	伝統	
ハンドメイド		

筆者作成

表7に示すとおり、テキストマイニングから得られたワードを分類した結果、大学生たちからはリメイク品に対してはポジティブなイメージがネガティブなイメージよりも多く得られ、全体の65.0%がポジティブなワードとなった。

本調査は2022年11月15日、16日に大学生200人(男100人, 女100人)に対して実施した。内容は予備調査の結果を利用した質問項目を23問設定し, 回答には二者択一, 5段階評価, 3件法を用いた。5段階尺度は1:まったくそうではない, 2:ややそうではない, 3:どちらでもない(わからない), 4:ややそうである。5:たいへんそうであるとし, 数字が小さいものは否定的, 数字が大きいものは肯定的な尺度とした。

ここからは結果について述べる。環境への配慮については男子は95人が, 女子は98人が必要だと回答した。どこで環境(環境問題を含む)に関する授業を受けたかという問については, 男子女子共に小学校が約3割, 中学校が約4割, 高校が約3割となった。受けていないと回答した者はいなかった。リメイク品のイメージについては図4に示した。

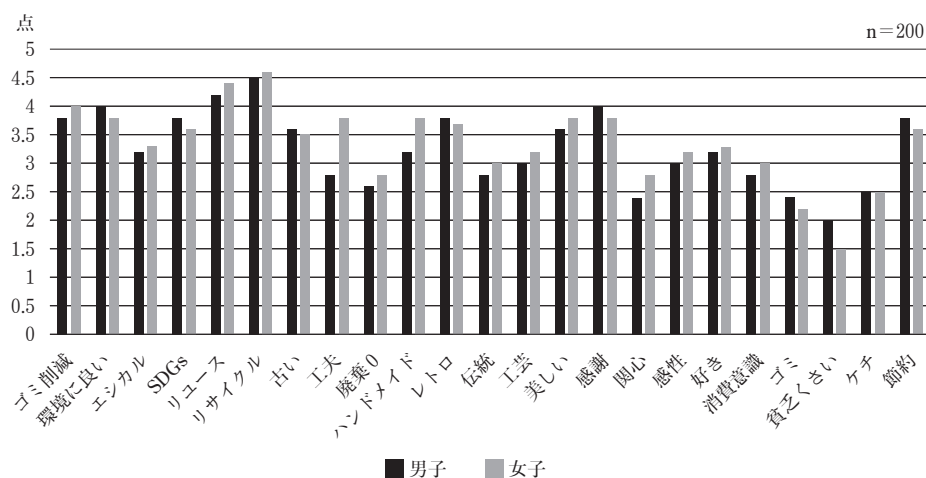


図4 大学生のリユース品に対するイメージ

注) 各項目の左側のグラフが男子, 右側のグラフが女子, 縦軸は5段階評価の評点 筆者作成

図4の右側では「ゴミ」「貧乏くさい」「ケチ」というイメージが現れている。これらはリメイク品のマイナスイメージである。図4の左側には「リユース」「リサイクル」という3Rにつながるイメージも現れている。3Rは「リユース」「リサイクル」「リデュース」を指し, 最近はこれに「リメイク」が加えられて, 廃棄を防ぐ手法として認識されている。図4で得られたリユース品に対するイメージのワードを図5では感性的なワードと合理的なワードに分類をした。リメイク品に対しては, 合理的なワードの方が大学生にはイメージされていることが理解できる。

合理的なイメージのワードをさらに2つに分類するとひとつは行動に結びつくワードであり, もうひとつは知識に結びつくワードとなった。「節約」はまさしく節約するという行動であり, 「工夫」も工夫をするという行動である。「SDGs」は持続可能な開発目標の

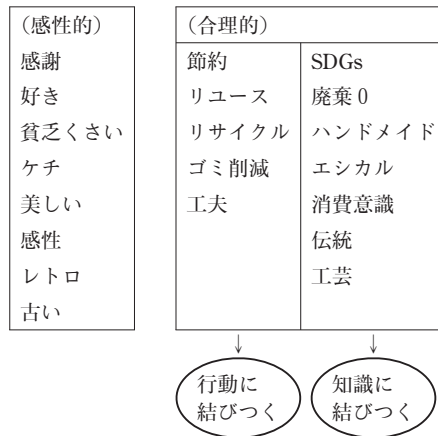


図5 得られたワードの二分類

筆者作成

ことで2015年の国連サミットで加盟国の全会一致で採択された目標である。これには17のゴールと169のターゲットが設定されている。「エシカル」や「消費意識」も知識に結びつくワードとして挙げた。

この調査の最後に環境への関心度とリメイク品への好感度との関係を大学生に3件法で回答してもらった。環境に対して3つの評価基準は1：関心がない，2：どちらでもない，3：関心があるとし，数字が大きい方が肯定的な意見となる。またリメイク品への好悪に関しては5段階尺度を使用した。リメイク品に対する5段階尺度の意味は1：とても嫌いである，2：やや嫌いである，3：どちらでもない，4：やや好きである，5：とても好きであるとした。回答の一部を例として表8に示した。男子大学生の環境への関心度の平均値は2.09，女子大学生は2.28となった。リメイク品への好悪の平均値は男子大学生が3.39，女子大学生が3.63となった。これらの回答をデータとして相関分析をした結果，男子大学生には0.718，女子大学生には0.711という両者共に強い相関が得られた。つまり環境への関心度が高い大学生はリメイク品も好きであるということがわかったのである。

この調査全体から考えられることは，リメイク品のイメージが65.0%程度ポジティブなものになることの背景として，大学生たちがこれまでに受けてきた教育環境があると考えられる。小学校から高校に至るまでの間に環境問題に対する授業を受けている彼らにとって，廃棄をしないということの重要性が理解できているのである。さて，女子大学生にはリメイク品のイメージにアクセサリーなどの手作りの品物があることに対して，男子大学生にインテリアや家具などの工業品，あるいは改造をするというイメージがある。リメイク品の好感度が高い大学生ほど，男女共に環境に対する関心が高いことも見いだせたが，

表8 環境への関心度とリメイク品の好悪との関係のデータ例

n=200

男子		女子	
関心度	好悪	関心度	好悪
3	4	3	5
3	5	3	5
3	5	3	5
3	5	3	4
3	4	3	5
2	4	2	4
2	4	2	4
2	3	2	4
2	3	2	3
2	2	2	4
2	4	2	4
1	4	1	3
1	1	1	2
1	1	1	2
1	1	1	1
1	3	1	2
1	3	1	1
1	2	1	2

筆者作成

これも背景には教育と具体的な品目との関係があると考えられる。

4. お わ り に

廃棄に関する研究をすすめていくと、環境問題、消費者心理（イメージや選択基準など）、消費者行動など多岐の分野に関わり、学際的な研究になる。また、衣類の選択基準については、これまでは購入時の選択基準としてサイズ、色、柄、スタイル、価格、品質、流行（定番）などが用いられてきたが、簡単に廃棄できるか否かという新しい基準も考えられる。たとえばトレーナーにチェーンがついている商品の場合、チェーンをとりはずして燃えないゴミに分別しなければならない地域もある。素材によっては古着としても、出品できないような衣類も存在する。衣類は永遠のものではないため、使用后、いつかは廃棄しなければならない。その時に古着として価値があるのか、燃えるゴミとして処分できるのか、リメイクできるものか等の選択肢が残る。

本論文の前半では、女子大学生が衣類を破棄する心的理由として「子供っぽく感じた時・年齢との不一致」と「自分のライフスタイルに合わなくなった時」が挙げられたことから、高校から大学に入学したことによって生活様式（装い）が大きく変化したことに影

響を大きく受けると推測された。衣類は生活様式と密接に関連しているため、生活様式の変化に伴い不要な衣類が発生するのである。これに対して男子大学生は衣類の廃棄の心的理由を重視していないことがわかった。男子大学生は「着心地が悪くなったと感じた時」、つまり衣類そのものの型くずれや縮みという製品の劣化や、自身の体形が変化した時に廃棄を考えるので、長年着た後に捨てるということになる。これに加えて「(衣類を)買ったが友人の評価が悪い時」もその衣類は廃棄の対象となる。したがって、男子大学生の衣類廃棄理由には女子大学生のように生活様式の変化という要因は少ない。「買ったが友人の評価が悪い時」の対処は「メルカリに出す」「古着として売る」という回答を得ており、廃棄するという回答は少なく衣類をリユースする人が多く見られる。

後半のリメイク品のイメージに関しては、「ケチ」や「貧乏くさい」というワードも上がり、必ずしも良いイメージばかりではなかったが、65%は肯定的なイメージを示すワードで、リメイク品に対する好感度も高い。現在の大学生たちにとって、リメイク品は環境を考慮した品物として認められていると考えられる。また、リメイク品の好感度が高い大学生ほど、男女共に環境に対する関心が高いことが見いだせた。今後は、リメイク品の好感度を上昇させ、それらの製品を受け入れてもらう有効な手段を模索することが必要である。

注

- 1) 外務省のホームページにある「JAPAN SDGs Action Platform」に詳細が示され、基本資料やパンフレットはPDFとしてダウンロードが可能である。また、同じ頁にSDGs関連動画が掲載されている。
- 2) 2022年10月に筆者が大学生200人に対して、SDGsと聞いて身近な環境と直接むすびつくイメージを有しているのかを問うた調査をした結果、17の目標のうち、上位は「7. エネルギーをみんなに、そしてクリーンに」95%「13. 気候変動に具体的な対策を」87%「14. 海の豊かさを守ろう」84%「15. 陸の豊かさも守ろう」80%という結果を得た。
- 3) 貞包英之(2023)『消費社会を問いなおす』筑摩書房、p.11を参考にした。軸については図1 消費社会の典型的「乗り越え」方内の縦軸と横軸を引用した。
- 4) もったいないブームに関する資料としてはインターネット上のJCASTニュース(<https://www.j-cast.com/2007/06/10008267.html?p=all>)のバックナンバーでも確認できる(2023年4月29日検索確認)。ここでは2005年3月に環境白書にも「もったいない」という言葉が掲載されたこと、当時、伊藤忠商事が参加企業を募り「MOTTAINAI」ブランドの商品を開発し、2006年4月には、リサイクルできるポリエステル製ネクタイを発売したことなどが記事として紹介されている。
- 5) 松原小夜子(2019)が大学に入学した新入生を対象に「もったいない」という意識と実際の行動を調査している。論文内で松原は「日常生活における環境意識や行動は、20代若者(研究

- 当時)が最も低い」と指摘し、その根拠として日本能率協会総合研究所(2008)に掲載されているインターネット調査結果を挙げている。40頁に掲載された結果では「地球温暖化」などへの認識には世代による大きな違いはないが、「ゴミの分別」などの日常生活行動では、10項目中9項目において、20代若者が最も低く、年代が上がるほど高い」と指摘がなされている。
- 6) 松原小夜子, 後藤春香(2012)が実施した調査の対象者のカテゴリーは155頁表1 調査対象の属性を引用, 質問項目については表2「もったいない」意識と実際の行動に関する質問項目を参考, 結果については156頁を参考とした。
- 7) 大藪千穂・杉原利治(2008)「学校給食の残滓」『日本家政学会誌』520(59), 621~630. この論文では食品ロスの実態の例示として学校給食を取り上げている。
- 8) 本文の記述は大藪千穂・高橋彩那(2018)「若者の環境意識と行動」『消費者教育』日本消費者教育学会のp.91 図1 関心のある環境問題から引用した。
- 9) 本文の記述は河井紘輔(2021)「一般廃棄物のリサイクル率に関する課題と展望」『情報の科学と技術』情報科学技術協会のp.62を参考とし, 同頁の図3 日本とEU加盟国におけるごみのリサイクル率(%)でも確認をした。
- また, 河井は「どんなにリサイクル率が高くても, 排出量や最終処分量が多ければ環境負荷は増大することになる」とp.64で述べている。
- 10) 山田由佳子・西澤陽子・重田美智子(2004)「大学生の衣服リサイクルに関する意識と実態—古着の入手に着目して—」『大阪教育大学紀要 第II部門:社会科学・生活科学』52(2), 49-62では, 結果として「全体の7割の者がペットボトル再生繊維衣服を知っているものの, 着用経験者は1割程度で, 着用経験の無い者はマイナスイメージが強く, 今後の着用意向も消極的である」とされている。ここから知識があることがそのまま着用には結びついていないことが理解できる。
- 11) 辻幸恵が「ハレの場に着用する衣類の選択基準」というテーマで日本繊維機械学会第68回年次大会, 会場は大阪科学技術センターにて2015年6月6日に口頭発表をした内容の一部である。
- 12) リメイク品に関する記述はhttp://www.auction-style.com/glossary/fashion_remake.htm (2023年1月15日検索)を参考とした。

参 考 文 献

- Raoul VossI, Roh Pin Lee, Magnus Fröhling. (2023) “A consequential approach to life cycle sustainability assessment with an agent-based model to determine the potential contribution of chemical recycling to UN Sustainable Development Goals” *Journal of Industrial Ecology*, 27, 726-745, DOI: 10.1111/jiec.13303
- Sandin G., Petters G.M. (2018) “Environmental impact of textile reuse and recycling-A review” *Journal of Cleaner Production*, 184, 353-365.
- Woolridge, A.C., Ward, G.D., Phillips, P.S., Collins, M., Gandy, S. (2006) “Life cycle assessment for reuse/recycling of donated waste textiles compared to use of virgin material: An UK energy saving perspective” *Resour.Conserv.Recycl*, 46, 94-103
- Zamani, B., Svanstrom, M., Psters, G., Pydberg, T. (2014) “A Carbon Footprint of Textile Recycling:

- A Case Study in Sweden” *Journal of Industrial Ecology*, 19, 676-687
- Zamani, B., Sandin, G., Peter, G.M. (2017) “Life cycle assessment of clothing libraries” *Journal of Cleaner Production*, 162, 1368-1375
- 浅野宗克・坂本清編 (2009)『環境新時代と循環型社会』学文社.
- 岩地加世 (2010) 廃棄物資源循環学会誌, Vol. 21, No. 3, pp. 132-139.
- 牛澤賢二 (2018)『やってみようテキスタイルニング』朝倉書店
- 大藪千穂・杉原利治 (2008)「学校給食の残滓」『日本家政学会誌』520(59), 621-630.
- 大藪千穂・高橋彩那 (2018)「若者の環境意識と行動」『消費者教育』日本消費者教育学会, 38, 89-98.
- 河井紘輔 (2021)「一般廃棄物のリサイクル率に関する課題と展望」『情報の科学と技術』情報科学技術協会, 71(2), 60-64.
- 小口忠彦訳 (1987), A.H. マズロー著『改訂版 人間性の心理学—モチベーションとパーソナリティー』産業能率大学出版部, (Maslow, Abraham H. (1970), *Motivation and Personality*, second edition, Harper & Row)
- 後藤ヨシ子・八木里佳 (2001)「環境問題に関する意識と行動」『長崎大学教育学部紀要 教科教育学』, 36, 75-82.
- 滋野英憲, 辻幸恵, 松田優 (2018)『マーケティング講義ノート』白桃書房
- 白木夏子 (2021)『ファッションの仕事で世界を変える—エシカル・ビジネスによる社会貢献』ちくま書房
- 貞包英之 (2023)『消費社会を問いなおす』筑摩書房.
- 瀬戸昌之 (2009)『持続社会への環境論』有斐閣.
- 辻幸恵 (2020)「フェアトレード・ファッションに対する購入心理」日本家政学会年次大会
- 辻幸恵 (2021)「フェアトレード商品に対する大学生の意識」神戸学院大学経営学論集第17巻第2号 pp-1-19
- 長尾弥生 (2008)『フェアトレードの時代』日本生活協同組合連合会
- 長坂寿久 (2009)『世界と日本のフェアトレード市場』明石書店
- 古沢広祐 (2021)『エシカル消費—持続的な社会を考える新しい環境問題』金の星社
- 松原小夜子・後藤春香 (2012)「日常生活における20代若者の「もったいない」意識と実際の行動—人間と生活環境」『人間と生活環境』人間—生活環境系学会, 19(2), 153-160.
- 松原小夜子 (2013)「日常生活における10代若者の「もったいない」意識と実際の行動—家庭生活習慣および学校での授業の影響—」『人間と生活環境』人間—生活環境系学会, 20(2), 155-165.
- 松原小夜子・黒光貴峰 (2018)「分野別にみた大学新入生の「もったいない」意識と実際の行動—家庭生活および環境学習との関係」『人間と生活環境』人間—生活環境系学会, 25(1), 1-15
- 松原小夜子 (2019)「大学新入生の「もったいない」意識と実際の行動—高等学校までの環境学習および家庭生活との関係—」『生活の科学』41, 39-55.
- 山田由佳子・西澤陽子・重田美智子 (2004)「大学生の衣服リサイクルに関する意識と実態—古

着の入手に着目してー」『大阪教育大学紀要 第Ⅱ部門：社会科学・生活科学』大阪教育大学,
52(2), 49-62.

目黒大学社会学部社会情報学科 (編) (2019) 『エシカル消費と社会デザイン』三弥井書店

渡辺龍也編 (2018) 『フェアトレードタウン』新評論

山本謙治 (2022) 『エシカルフード』角川書店